

# 公益事業レポート 2008

創業者生誕150年、没後80年記念  
遠山椿吉賞 創設



「すべての人びとのいのちと環境のために」

## いのちと環境は分けられない、 一体化した世界です。



当財団および医療法人の基本理念は、「すべての人びとのいのちと環境のために尽くす」ということです。東京顕微鏡院は、明治の細菌学者、遠山椿吉博士が118年前に創業し、36年かけてその基盤を築き、財団として後世に託したわけですが、戦後に再建された当財団がこれまで実践してきた保健衛生の事業は、すべての人びとに分け隔てなく、健康ないのちと、これを保てる生活環境を作り上げる、ということを究極の目標としてきました。

2008(平成20)年は、創業者生誕150年、没後80年を記念して、「遠山椿吉賞」を創設し、第1回授賞式を開催させていただく運びとなりました。この上ない光栄であり、また私どもの誇りとするところであります。創設にあたり、一方ならぬご支援ご助力を賜りました先生方に、この場をお借りして、深く御礼申し上げます。また、本年は、戦後の健康管理事業の発展に伴い公益事業として始まった、小笠原村成人病ドック(現健康診断)が30年を迎え、記念誌を発行し、遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム「東京の水の源流を探る」を開催いたしました。

振り返りますと、2008(平成20)年は、経済、金融、政治いずれをとっても激動の一年だったといえます。米国に端を発した金融不安が全世界を覆い、経済の成長に急ブレーキがかかりました。一年前二兆円を超える利益を上げたトヨタが、一挙に赤字に転落するという事実が、その変化の凄さを物語っています。昨年11月米国で史上初めてオバマ氏という非白人の大統領が誕生したのも、大きな意味では、変革、変動の一つの所産ではないでしょうか。しかもこの激動は、今年更に加速されると見られています。人びとの生活を支える経済や金融の基本的な仕組みに、百年に一度の大きな変化が生じている、と指摘する人も少なくありません。

百年以上前、創業者が伝染病の脅威に立ち向かった時代から、公衆衛生の分野では、多くの研究者が、科学を駆使して研究室で日々新たな課題に挑戦し、その成果を人びとの暮らしに生かすために地道な活動にまい進し、人びとのいのちと環境のために尽くしてきました。百年を経てその課題は解消されるどころか、近年、ますます、食・環境といった、いのちを取り巻く危険を未然に防ぐことが、その重要度を増してきております。このように激動する世界の情勢と、われわれとは、どのように結びつくのでしょうか。

## いのちと環境のために

この地球上で日々生じている激動、それを含む宇宙の全活動を考えてみましょう。

一般に、人間と、環境は別物だと考えられています。だからこそ「地球に優しく」などというスローガンが生まれるわけです。私たちは、自分の皮膚で、自分と外界とが分断されている、この中に自分がいて、外が環境だと思っていますが、実はよく考えてみると、別物ではありません。一人ひとり別々に存在している人間も、環境と切り離すことはできない、一体で、不可分の存在です。

もっとよく考えてみると、この皮膚自体が空気を呼吸し、空気と共存して初めて、人間のからだ、いのちは存続できる。つまりこの一瞬一瞬、空気と共同作業をして存在しているわけです。

われわれが存在している—それは空気によってこのいのちが存続している、ということです。水はどうでしょう。よく考えてみれば、からだの60~70%が水といわれています。

人間のからだは、空気と同じように、水との関係においても一体となって、水と共存して生きています。水や空気が、からだから出て行ったら生きられない。従って人間は生きていくうえで、水・空気によって生かされているといえます。

しかし、そこから更に一步踏み込んで考えてみると、本当にそうなのでしょうか。われわれの命は、こちら側で、空気・水によって生かされているというが、本当にそうか、もしや逆なのではないか。本当のいのちとは、向こう側にあるのではないか。実は水・空気こそが、本当のいのちなのではないか。これは、皆さんも一度頭の体操としてやってみる価値があると思います。

水の存在を例にとると、水の活動は地球の活動から生まれ、地球の活動は、宇宙の活動の中で生まれています。そこに、本当のいのちの源泉があるのではないのでしょうか。

水のあるところには、いのち・生命体があるといわれますが、もともと本当のいのちというのは水のほうなのではないか。人間の活動は、水の生命活動のひとつの現象なのではないか、という見方もできるほど、いのちと環境は分けられない、一体化した世界です。

水に命があって人間があるという一体感。あるいは、水によって生かされるという一体感。本当のいのちは水にあるという発想をすれば、本当のいのちはなくなるらない、ともいえます。

「すべての人びとのいのちと環境のために」という言葉をもとに、創業者生誕150年を記念した年、両法人の公益事業を振り返って、改めていのちと環境について考えをめぐらせました。

世界が大きな転換期を迎えています。徹底的に原理原点に立ち返ること、悲観しないこと、全組織一体となってまい進することを心構えとして、今後とも、公益事業と一般事業を一体としてすすめ、両法人が公衆衛生、予防医療事業を通じて更に大きく社会に貢献できる立派な法人に発展することを祈念いたします。

平成 21年 5月

財団法人東京顕微鏡院 理事長

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事長

山田 匡通

# 学術振興 (遠山椿吉賞創設)

## すべての人びとのいのちと環境のために

当財団創業者で初代院長である医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念し、2008(平成20)年度に公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度を創設しました。この賞の創設のために、特段のご支援・ご協力・ご指導をいただきました多くの先生方、関係団体の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

### 遠山椿吉賞の創設

本賞は、財団法人東京顕微鏡院および当財団の保健医療部門を統合し分離独立させた医療法人社団こころとからだの元氣プラザ(以下両法人)が創設した顕彰制度で、日本の公衆衛生において、人びとの危険を除き、命を守るために、先駆的かつグローバルな視点で優れた業績をあげた個人または研究グループに対して、賞状、記念品および副賞として100万円を贈呈するものです。奨励賞は、該当者のある場合に限り、選考委員会の推薦を受けて両法人経営会議で決定し、賞状および副賞として20万円を贈呈するものです。賞は、「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と、「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」の2部門あり、隔年で選考顕彰します。



(2008年5月15日 1面)

### 選考の過程

2008(平成20)年4月に賞を創設し、学会や関連の媒体を通して、また、当法人のホームページで広報を行いました。7月末日までに6件の応募があり、8月19日に選考準備委員会を開いて3名の専門委員による第1次選考を行いました。9月30日に7名の選考委員による本選考委員会を開催。



この選考委員会の推薦を受けて、10月3日の当財団・医療法人共同の経営会議で、西尾治氏に受賞者が決定しました。人間の腸で増殖し、汚染便と共に排泄されたウイルスが河川・海を汚染し、カキの中腸腺に蓄積し、食べた人が感染するというノロウイルスの感染ルートを分子疫学的につきとめ、食中毒防止に大きく寄与した功績が評価されたものです。

また、製造現場での食品衛生向上手法の開発にユニークな着眼点で取り組んだ川崎晋氏が、今回特別に「奨励賞」を授与すべき若き研究者として選考委員会から推薦され、同じく受賞が決定しました。

### 遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞

平成20年度は、食品衛生と、生活環境衛生、感染症対策を重点課題としました。腸管出血性大腸菌(O157)やノロウイルス、鳥インフルエンザなど細菌学、ウイルス学の観点からの研究、アスペストやダニ、カビなど室内環境の研究、感染症と水の問題などを想定し、幅広い分野からの応募を呼びかけました。

#### 遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞



**西尾 治** (にしお おさむ)

国立感染症研究所 感染症情報センター  
客員研究員

「ノロウイルスによる食中毒の発生要因の解明と  
予防策の樹立に関する研究」

#### 遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞 奨励賞



**川崎 晋** (かわさき すすむ)

(独)農業・食品産業技術総合研究機構  
食品総合研究所 研究員

「食品衛生微生物の簡易迅速検査法の開発と有効性の評価、  
食品衛生向上手法の開発」

4月 有識者ヒアリング  
創設委員会  
経営会議で承認  
選考委員決定



7月末日 締切

8月 選考準備委員会

9月 選考委員会

10月 経営会議で決定

2月 授賞式・記念講演会  
レセプション

● 遠山椿吉賞 創設  
食と環境の科学賞

募集告知

● 6件 応募

● 3件に絞込み

● 遠山椿吉賞および  
奨励賞推薦







### 創立者 遠山椿吉(とおやま ちんきち)

1857(安政4)年山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学校長心得などを歴任。1888(明治21)年東京医科大学撰科に入學し、衛生学および細菌学を研究。1890(明治23)年1月、帝国医科大学国家医学科に入學、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顕微鏡院の前身である東京顕微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顕微鏡学会の創立、ペスト菌の研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力、また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顕微鏡』『東京顕微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顕微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日遠逝。享年71歳

## 2月4日 遠山椿吉賞 授賞式

「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」の授賞式・記念講演会・レセプションは、2009(平成21)年2月4日(水)に東京・飯田橋のホテルメトロポリタン エドモントにて開催されました。受賞関係者や各地の衛生研究所・保健所、食品メーカーの役員ほか当法人関係者など、百名を越す参加者が祝福に集まりました。

山田匡通理事長は、「本当にこのような立派な研究に遭遇したことを、心から喜んでおります」と述べ、「お二人の研究はグローバルな、まさに将来性の極めて高い研究であるという印象を強く受けました。お二人がこれを機会にますます研究内容を深めて、公衆衛生と予防医療により一層貢献されることを祈念いたしまして祝辞とさせていただきます」と結びました。

平成21年度は、「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を選考顕彰いたします。詳細は、当財団ホームページをご覧ください。



山田匡通理事長より西尾治氏に遠山椿吉賞を授与。



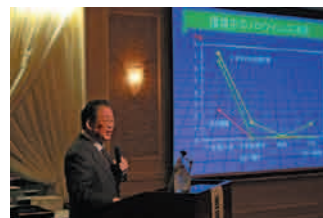
西尾治氏、川崎晋氏(右から)



選考委員長講演:中村靖彦氏



祝辞:渡邊治雄 国立感染症研究所副所長



受賞記念講演:西尾治氏



受賞記念講演:川崎晋氏

### 受賞者あいさつ:

**西尾 治先生** 「われわれの研究は、本当に長年かかってこつこつと、数百、数千、あるいは万というデータを集めて、やっとものが言えるという、地道な研究であります。このような研究に光を当てていただいた選考委員の先生方に感謝いたしております。この受賞は、現在こつこつと研究されている研究者達に、希望を与え、新たに研究の意義を再認識して、これからも頑張っていただけのも、と思っております。(後略)」

**川崎 晋先生** 「私は、現場にできるだけ適合する迅速検査手法を開発するという観点で研究しましたが、ポストドク\*や任期付研究員という非常に不安定な立場にも拘わらず、多数の方に御協力頂き、励まされたことが私の研究を安心して進める上で大きな励みとなりました。その研究成果をこのような場で認めていただけたことは、大変嬉しく思っております。(後略)」

\*博士号取得直後の数年契約の研究者

川崎晋氏は、授賞式と同月に正規職員である主任研究員に着任されました。

\*平成20年度「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」授賞式について詳細は、財団ホームページをご覧ください。

## ■ 第三者意見



### 渡邊 治雄 国立感染症研究所 副所長

「遠山椿吉先生のモットーは、実験室で行った成果を公衆衛生の現場で生かすことだと伺いましたが、西尾先生の研究はまさしくそれを地でいった成果だと考えております。ノロウイルスが環境内で生息する実態を新しい技法を用いて明らかにした点で非常に優れていると同時に、各地方衛生研究所と国立感染症研究所をネットワークで結び、日本各地の実態も明らかにしたことが、この研究に広がりを与えました。川崎先生は、まだ若い研究者ですが、非常に目の付け所が適切で、食品等における微生物の汚染状況を測る方法論の開発にまい進して研究成果を上げておられます。東京顕微鏡院が、食と環境及び公衆衛生に対して貢献される方を、このような形で表彰する賞を設けられたことは、非常に現代の要請にかなった賞であると感じております。」

# 学術振興

## 学会・研究会への助成活動

「日本食品微生物学会」は、食品の微生物に関する学術研究の推進、並びにその成果の普及を図り、食品の安全及び機能の向上に寄与することを目的とした、食品業界ではユニークな学会です。当財団はその事務局機能を学会発足時から担うと同時に、新しい食中毒被害を未然に食い止めるため、「日本カンピロバクター研究会」の第1回研究会総会事務局を務めるなど、保健衛生分野で学術振興に努めています。

### ①「日本食品微生物学会」への助成



学会の前身である「食品衛生微生物研究会」は、食品の安全や品質管理に係る微生物検査、研究を担当される各専門分野の方々が一堂に会して十分に討議し、互いの知識、技術の情報交換を密にして、研究の一層の発展を図る目的で、昭和55年11月に発足しました。

その後、対象とする研究分野の拡大を図り、名称変更とともに学会として改組し、平成2年4月「日本食品微生物学会」として出発いたしました。

当財団は平成元年4月以降、同学会への助成活動の一環として、施設や事務職員など事務局機能の提供を行い、その活動を支援しています。



### ②「日本カンピロバクター研究会」第1回総会事務局として活動支援

今年度、カンピロバクター菌の研究・調査・感染症制御など、国民の保健医療や食品衛生に貢献することを目的に「日本カンピロバクター研究会」が設立され、同時に、平成20年12月2日、第1回研究会総会(於日本橋社会教育

会館)が開催されました。

当財団は本総会事務局を務め、学術振興を図りました。鶏肉等や牛レバーなどの生食により発症するカンピロバクター食中毒は、近年増加の一途をたどり、細菌性下痢症では最も主要な病原菌となっています。

# 学術振興

## 医師や職員による研究・学会発表

当財団では、医事衛生の研究及び振興に資するため、調査研究活動の助成について、今後更に力を入れていこうとしています。地道な取り組みとして、日常業務を通じて得た問題意識を研究に生かし、その成果を発表することで公衆衛生の向上に努めています。

### ①「性差・年齢差を考慮した基準値(ViVi数値)を用いた場合と従来の基準値を用いた場合の比較研究」

代表者:木村慶子 医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事

共同研究者:小田瑞恵、高築勝義、細井義男、山田睦子、星順子、島田直樹\*、松葉尚子

\*慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学教室

日本性差医学・医療学会第2回学術集会(平成21年2月7日(土)鉄門記念講堂(東京大学医学部教育研究棟)ポスターセッションにて発表。

### ②「部分放散チャンバー試験におけるパッシブサンプラー捕集時間の検討及び発生源と推定する際の基準(根拠)の検討」研究

代表者:瀬戸 博 当財団食と環境の科学センター 環境衛生部 環境検査科

共同研究者:箭内慎吾、山賀健治、千代田守弘、川俣友、小村麻子、荒川恵子

当法人創立記念の日・研究業務改善発表会(平成21年2月14日(土)サイエンスホール)にて発表。平成21年度室内環境学会発表予定。

### ③「加工食品等の有機リン系農薬一斉分析法」研究

代表者:今澤 剛 当財団食と環境の科学センター 食品理化学検査部

共同研究者:飯田智成、関 亘

平成20年2月のいわゆる『中国産餃子中毒事件』を契機に、生鮮農産物以外の加工食品等を対象にした残留農薬試験法が必要となり、当センターにおいて加工食品中の有機リン系農薬一斉分析法(62成分同時分析)を検討。当財団平成20年度事業年報にて発表予定。





# 地域貢献

## 次世代を担う子どもたちへ

地域貢献活動の一環として、日本橋研究所近隣の小学校、5・6年生を対象に「夏休み子ども研究者体験」セミナーを実施しました。所長をはじめ、日ごろ業務として食品微生物検査を指導する食品安全サポート部職員、公益事業委員による、子どものための研究者体験です。

また、昨年に続き、千代田区立九段中等教育学校の校外学習として、食品の賞味期限・消費期限に関する学習会を行いました。

### ①平成20年度「夏休み子ども研究者体験」セミナー

白衣を着て、目に見えない微生物を観察しよう！

～きれいな手、きれいな水ってホント？～

◎後援：中央区教育委員会

◎参加校：中央区立有馬小学校、中央区立日本橋小学校、中央区立久松小学校

■A日程：8月2日(土)～3日(日) ■B日程：8月9日(土)～10日(日)



今年度は、水道水の検査基準を主唱した遠山椿吉の生誕150年にあたるため、自宅の水道水などを使って残留塩素やpHを測定したり、市販されている世界各地の水を飲み比べ、硬度の差を舌と測定値で確認しました。

また、ヨーグルトや納豆、ぬか漬けを使って、人の暮らしに「役立つ菌」の培養実験も実施し、充実した時間を過ごしました。

明治時代、当時毎年のように流行し、多くの死者を出していた伝染病から人びとを守るため、「顕微鏡の手ほどきを人びとに授けよう」との思いから、1891年に東京顕微鏡院はスタートしました。設立者、遠山椿吉の創業精神を受け継いで、今年も小学生を対象に、顕微鏡を使って身近な微生物を調べる地域貢献セミナーを開催しました。夏休み期間に2回実施し、計19名が参加しました。



参加した子どもたちからは、「目に見えない菌が、本当にいることを知って驚いた」「世の中には、いろいろな菌があって、それらの菌がないと、人間も生きていけないことがわかった」「水はちゃんと注意しないと、意外に危険なもので、いい水にするためにいろいろな設備があって苦労していることを知った」など、真剣に取り組み、感動に満ちた感想が聞かれました。



日本橋研究所の研修室に集まり、自分たちで採取した隅田川の水や、自分の手についている菌を培養し、「グラム染色」という本格的な方法で顕微鏡検査の体験をしました。採取から培養までを自分で行う二日間のスケジュールでは、寒天培地に付けた小さくて目に見えない微生物が、翌日には目に見えて変化したことで生きている菌の存在を実感。科学に対する興味がさらに大きくなったようです。



### ②地元中学の校外学習に協力



当財団「市ヶ谷本院」近隣にある千代田区立九段中等教育学校の総合的な学習「都市文化」校外学習の一環で、11月10日、当財団「食と環境の科学センター」日本橋研究所は1年生の男子生徒2名、女子生徒2名の訪問を受けました。伊藤武所長が食べ物や空気などの検査概要を説明し、食品安全サポート部の林奈央子さんが、学習テーマ「食品の賞味期限・消費期限について」を解説。生徒たちは、食品のラベルの見方、具体的なデータ収集の方法、賞味期限と消費期限の違いなど、「食品表示」を学習しました。



約3ヶ月後の1月30日、生徒たちは再び日本橋研究所を訪れ、加工食品の表示方法や食品の期限について、本当に安全に食べているかという問題意識をもって自ら調査した結果を報告しました。食品を無駄にしないことの大切さも実感でき、生活に役立つ学習成果が得られたようです。



# 普及啓発 (健康セミナー)

## “こころ”と“からだ”の健康のために

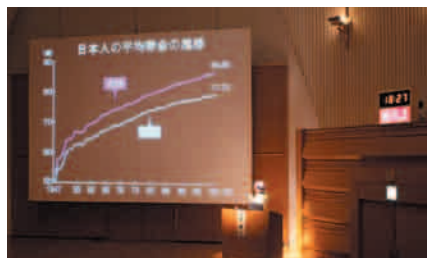
本年度は、「人生80年時代」に健やかな老後を過ごすため、働きざかりからの健康づくりを重点課題としました。また、私たちが生きるうえで不可欠な食事を取り上げ、「食卓」を通じたコミュニケーションの大切さをテーマとしたところとからだの健康セミナーを開催しました。

### ①健康に関するセミナー

◎シリーズ「働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり」全3回  
(会場はすべて女性と仕事の未来館)

◆7月30日「元気な高齢期は1日にしてならず」(参加者数:221名)

◎後援:厚生労働省、東京都、(財)骨粗鬆症財団、(財)長寿科学振興財団、日本抗加齢協会



基調講演では、老年学の第一人者である、健康科学大学の折茂肇学長に「健康長寿のためのアクティブエイジング」と題し、働きざかりから始める健康面での心がけや高齢期の健康の注意点などについて分かりやすくお話しいただきました。



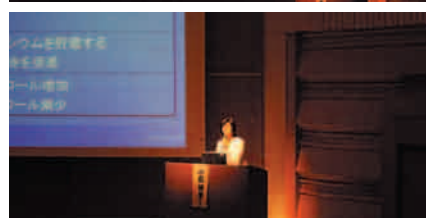
健康運動科学がご専門の東北文化学園大学の植木章三教授からは、「生活に根ざした運動を見直そう～生活体育のすすめ～」と題し、高齢期の筋力維持の大切さや、転倒・寝たきり防止のためにどんな運動から始めればいいのかをお話しいただき、タオルを使った運動の実技指導を行いました。参加された皆さんは楽しく手足を動かし、会場は熱気に包まれました。

◆9月10日「“更なる年”をイキイキ生きる出発点 男と女の更年期ケアとつき合い方」(参加者数:177名)

◎後援:東京都、日本抗加齢医学会、(財)骨粗鬆症財団、(財)長寿科学振興財団、日本抗加齢協会

帝京大学医学部主任教授で、男性の更年期に詳しい堀江重郎先生が「男性ホルモンから始まるメンズヘルス」と題し、最近社会に認知

されてきた男性の更年期障害の特徴とそのケア、男性ホルモンの減少と生活習慣病との関連などについて分かりやすくお話しいただきました。



長年女性の健康を総合的にサポートされてきた、女性のための生涯医療センターViVi所長の小田瑞恵先生は、「更年期をイキイキ過ごすヘルスケア」と題して、ほてり、のぼせ、うつなど、さまざまな症状が現れる更年期障害に対し、一人で悩むことなく、上手に乗り切るための知恵をお話しいただきました。

会場にはお互いの更年期を理解するために、夫婦でご参加された方々も見受けられました。

◆11月19日「睡眠障害とこころの病一事例と対策」(参加者数:340名)

◎後援:厚生労働省、東京都、(財)長寿科学振興財団、日本抗加齢協会、健康日本21推進全国連絡協議会



睡眠に対する社会的な関心の高さから、セミナーの参加募集開始より多くの方にお申込みいただき、シリーズ最高の参加者数となりました。

基調講演では睡眠障害の専門医で、東京医科大学兼任教授の(財)神経研究所附属代々木睡眠クリニック院長の井上雄一先生より、睡眠から考える健康づくりとして、睡眠障害の概論、質の高い睡眠を得るにはどうしたらいいのか、加齢とともに浅くなる眠りや、ライブ

ステージごとの睡眠対策などを、具体例を交えてお話しいただきました。(全3回シリーズの内容をもとに小冊子を出版しました→P11)

### ②食に関するセミナー

◆2月28日「コミュニケーションも食べる食卓」

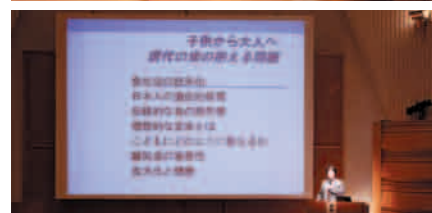
(女性と仕事の未来館 参加者数:176名)

◎後援:内閣府、東京都、(社)日本栄養士会、健康日本21推進全国連絡協議会

食事を単にエネルギーや栄養素の補給の機会としてではなく、「食卓」を通じたコミュニケーションの大切さをテーマに、食事と心の成長、味覚育成の大切さ、食事で築く仲間との団結など、それぞれの分野から3人の講師にお話しいただきました。

発達心理学がご専門の聖徳大学の室田洋子教授からは「こころを育てる食卓」と題し、食品・栄養科学がご専門の京都大学大学院の伏木亨教授からは、「おいしいと感じる食卓」と題し、元南極観測隊調理隊員で作家の西村淳先生からは、「仲間との絆を深める食卓」と題し、それぞれの研究や経験を踏まえた講演に、会場から活発な質問が寄せられました。

このセミナーには、北海道や秋田県、愛知県など遠方からの参加もあり、参加者の皆さんは3つの切り口からの「食卓」の話に熱心に耳を傾けていました。





# 普及啓発

(食と環境のセミナー)

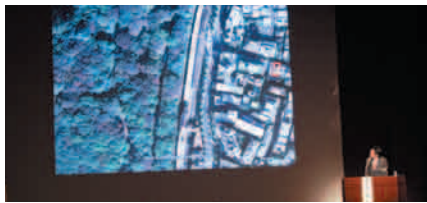
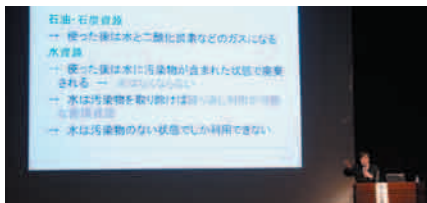
## ③遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム

◇3月14日「東京の水の源流を探る～豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水～」

(時事通信ホール 参加者数:228名)

◎後援:東京都、(独)水資源機構、(社)日本水道協会、全国給水衛生検査協会

「水」に対する社会的な関心が高まりつつある昨今、東京(首都圏)の水を中心に、水を使う側から考えるシンポジウムを開催しました。



基調講演では、「東京の水はどこから来ているのか」と題し、東京大学名誉教授の高橋裕先生より東京の水循環の現況と問題点について、「都市の隠れた水問題 蛇口から出る水は大丈夫か」と題し、麻布大学の早川哲夫教授より、身近な水(都市の貯水槽水道や水道管の問題)について、「緑のダムとは何か期待される水源の森」と題し、東京大学愛知演習林の蔵治光一郎講師より水源地での森林のはたらきについて、「東京で使う世界の水 見えない水を考える」と題し、東京大学の沖大幹教授より食糧・エネルギー問題とも

## 身近な食や環境の問題について

本年度は、東京顕微鏡院を創立し、初代東京市衛生試験所長を13年間兼任して水道の衛生管理向上に尽力した当財団の創業者、遠山椿吉の生誕150周年を記念し、水に関するシンポジウムを開催いたしました。また、私たちは20年以上にわたって企業の食品衛生担当者や環境衛生担当者対象のセミナーを開催しており、最先端の食や環境の情報の提供に努めています。

複雑に絡む世界の水問題と東京の密接な関わりについてご講演いただきました。



パネルディスカッションでは、グローバルな視点から気候変動などによる渇水問題、水源地の荒廃、老朽化する「水の管理施設」の更新・管理などを取り上げ、専門家が構想する「東京の水」の未来を語り合い、生活者目線では何が出来るのかを討議しました。

## ④食と環境のセミナー

私たちは、20年以上にわたり、企業の担当者などを対象に、食や環境など実務に役立つ、時代の最先端の情報を提供しています。本年度も4回開催しました。

第70回の「食品企業の危機管理/ノロウイルス食中毒の最新情報と対策」では、遠山椿吉賞を受賞された西尾治先生が講演されました。

◆第68回 食と環境のセミナー(7月11日)  
「東京都における食品表示の取り組み/理化学試験から見た食品の安全・安心」  
(日本橋社会教育会館 参加者数:207名)

◆第69回 食と環境のセミナー(9月18日)  
「醤油の健康力/オーストラリアにおける農畜産物の衛生管理」  
(日本橋社会教育会館 参加者数:63名)

◆第70回 食と環境のセミナー(11月5日)  
「食品企業の危機管理/ノロウイルス食中毒の最新情報と対策」  
(日本橋社会教育会館 参加者数:190名)

◆第71回 食と環境のセミナー(2月18日)  
「“ケミレス”化学物質を削減した社会作り～シックハウスへの対応～」  
(日本橋社会教育会館 参加者数:142名)



## ☆参加者の声を反映した セミナーづくりと高い満足度を、 これからもめざしてまいります。

セミナーでは事前にアンケートにご協力いただき、聴衆の構成や講演に関する疑問や関心点を講師に伝えて、講演内容に反映させました。セミナー後のアンケートでは、すべての講演で多くのお客様から満足な内容との回答をいただきました。(お客様の声:一部抜粋)

\*\*\*\*\*  
○「元気な高齢期は1日にしてならず」  
老化の最新情報をユーモアたっぷりにお話し下さり、とてもためになりました。周りにも是非この話を広めたいと思います。  
(女性 40代 会社員)

タオルを使つての体操はどこでも出来るのでとても良かった。毎日の生活に取り入れて、いつまでも元気な体を作り、生活に張りを持たせていきたいと思っています。(女性 70代)

○「“更なる年”をイキイキ生きる出発点 男と女の更年期-ケアとつき合い方」  
男性ホルモンについての認識はほとんどなかった。メタボ対策を行う上で大変参考になり、有意義に感じた。(男性 50代 会社役員)

女性の体のメカニズムを知らなかったが、これから奥さんを気づかうのに大変参考になった。(男性 40代 会社員)

○「睡眠障害とこころの病-事例と対策」  
睡眠薬の飲み方(選び方)や不眠症の解決方法など、まさにかゆい所に手の届くような内容でした。とてもよかったです。  
(女性 30代 会社員)

※健康セミナーの内容は小冊子で。詳しくは⇒P11

○「コミュニケーションも食べる食卓」  
家族で囲む食卓が、子供の成長と性格にまで影響する事が良く分かりました。食事という毎日欠かさない事が、その人を形作っている事を実感しました。(女性 20代 会社員)

離乳食前後が子どもの味覚形成にとっても大切な時期である事、実験の結果を踏まえた、ダシに対する依存症など、とても興味深いものでした。保育所で栄養士として働く私にとって、新しい課題が見つかった気がします。  
(女性 30代 栄養士)

○「東京の水の源流を探る～豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水～」

現状にばかり目がいく事が多いが、東京の水道の歴史や係った人たちの努力など、また世界における東京水の品質の高さなど学ぶことができた。(男性 40代 会社員)

水とエネルギーと食糧をバランスよく考えて生活する事が大切だと感じました。  
(女性 20代 会社員)

# 出版関連

## 幅広く健康・生活情報を提供

小笠原健康な村づくり「成人病ドック(現健康診断)」30年の軌跡を記念誌にまとめました。

また、健康セミナーをもとに「働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり」を小冊子にし、さらなる予防医療の普及・啓発に努めています。

### ①『小笠原健康な村づくり 健康診断30年のあゆみ』

「すべての人びとのいのちと環境のために」という当法人の基本理念に基づき、昭和53年度公益事業として始まった、小笠原健康な村づくり「成人病ドック(現健康診断)」が30年目を迎えました。そこで、今後の健康づくりに役立つ資料とするため、小笠原村健診30年にわたる経年資料等に当法人医師による



考察を加え、第三者意見および、住民の声を掲載いたしました。また、よりよい健診作りに向けた新たな取り組みとして、小笠原村と協働して島民アンケートを実施し、その結果と考察、今後の課題を掲載いたしました。

平成20年5月以降、編集委員会を重ね、平成21年2月10日に発行いたしました。

発行日:平成21年2月10日

サイズなど:A4判 76ページ

発行部数:2,500部

企画編集:小笠原村

財団法人東京顕微鏡院

医療法人社団ころとからだの元気プラザ

「小笠原村健康な村づくり

健康診断30年のあゆみ」編集委員会

発行:財団法人東京顕微鏡院

配布先:小笠原村、関係機関・団体、その他



#### 目次

あいさつ ・小笠原村長 森下一男  
・当財団/医療法人 理事長 山田匡通

1. 小笠原村の概要
2. 「成人病ドック(現健康診断)」の変遷
3. 「成人病ドック(現健康診断)」成績-30年間の考察  
当医療法人  
外来診療チーフドクター 丸山正隆  
理事・医療サービス事業本部長 大村峯夫

#### 特集 明日の健康づくりに向けて

4. 小笠原村魅力ある健康診断づくりに向けたアンケート
5. 「アンケート」結果を受けた今後の課題  
小笠原村村民課福祉係
6. 「アンケート」結果を受けて  
当医療法人 健康づくり事業本部  
健康診断事業部

#### 特別寄稿

7. 健康管理活動を通じて日本の地域社会のあり方の提示を  
慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学 教授 武林 亨
8. これからの健康づくりとは  
当医療法人 専務理事・統括所長 高築勝義
9. 「成人病ドック(現健康診断)」30年を振り返って  
島民の皆さんおよび当医療法人役員・医師

#### 〈資料編〉

あとがき  
当医療法人 常務理事・健康づくり事業本部長 太田千代次

健診が始まった当初は、この遙か離れた村に無料で健診を行なってくれるそんな奇特な機関が存在するなんて不思議でありませんでした。(中略)現在もそうですが、あれだけの健診スタッフ、各科の著名な先生方をお連れしての長期滞在の費用は膨大なものだと思います。(中略)この30年の間に特に私共夫婦を始め多くの方々の生命が救われたと思います。



『「成人病ドック(現健康診断)」30年を振り返って』より  
母島 佐藤直人さん

私の毎日は、早朝のウォーキングではじまります。(中略)帰宅してからラジオ体操をし、体重をはかり、それを毎日カレンダーに記入し、翌日は100グラムでも少なくて心がける。そして決まった時間に血圧をはかります。(中略)こうして小笠原の自然に心を癒され、年に1回、健康診断で科学的に体を検査していただき、自立した高齢者を目指し、死ぬまで元気をモットーに、日々楽しく過ごしたいと思っています。



『「成人病ドック(現健康診断)」30年を振り返って』より  
父島 上部 充子さん

30年間の歩みを受診者数・受診率とともに眺めると、受診者数が376名(昭和53年度)から1,020名(平成18年度)へ増加しただけでなく、その受診率も44.3%から61.9%へと上昇していることが目を引く。(中略)地域の健康づくりにおいて、エンパワメント、すなわち住民自らが主体的に健康づくり活動に参加することがますます重要視されるようになってきているが、本事業は、その先鞭として30年を経過した、いわば「小笠原村一頭微鏡院モデル」ともいべき健康管理活動といえよう。

慶應義塾大学医学部衛生学公衆衛生学  
武林 亨 教授

「小笠原への訪問健診30年の内視鏡医」  
朝日新聞「ひと」欄で紹介されました。





## ②事業年報

東京顕微鏡院と元氣プラザ両法人の事業を継続的に情報開示することにより、公衆衛生に関する現状を社会に開示する、という編集方針に基づき、発行しました。

冊子は、新たな経営方針に従い、両法人連名で始まる仕様としました。また、本年度は、両法人の学術的な取り組みに重点を置き、トピックスや研究・学会報告を巻頭に掲載しました。



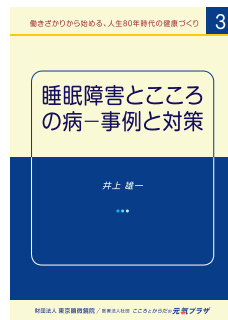
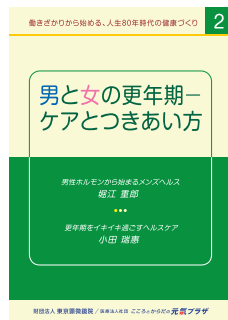
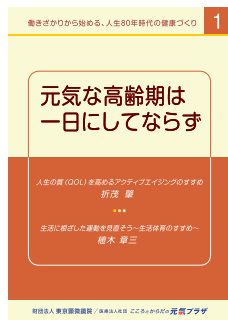
発行日：平成20年8月6日  
 サイズなど：A4版、146ページ  
 発行部数：800部  
 配布先：契約先、関係行政機関、  
 関係研究機関、関係団体など

## ③働きざかりから始める、人生80年代の健康づくり

人生80年代をキーワードに、元気な高齢期、男と女の更年期、睡眠障害のテーマで行なった3回シリーズのセミナーをもとに、手に取りやすいA5サイズの小冊子(全3冊)にいたしました。脱メタボリックシンドローム

大作戦とならび、皆さまの健康づくりにお役立っていただけるシリーズです。

発行日：平成21年3月  
 サイズなど：A5判 ①②64ページ ③32ページ  
 発行部数：各1,000部



## ④脱メタボリックシンドローム大作戦

昨年度出版し、ご好評いただいている本シリーズも3刷目の増刷に入り、なお多くの皆様の健康づくりにお役立っていただいています。平成21年2月現在、のべ12,000名を超える方々にご覧いただく大人気シリーズに成長いたしました。

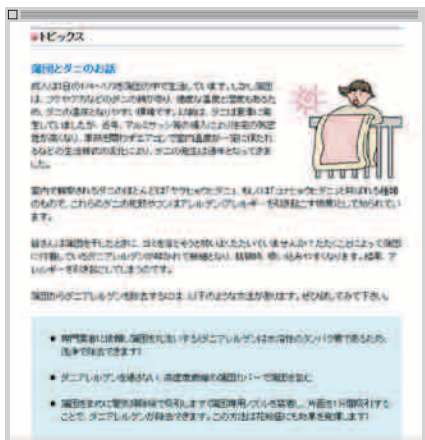
発行日：平成19年10月  
 サイズなど：A5判 ①③24ページ ②28ページ  
 発行部数：①②各5,000部、③7,000部



## インターネットによる情報提供

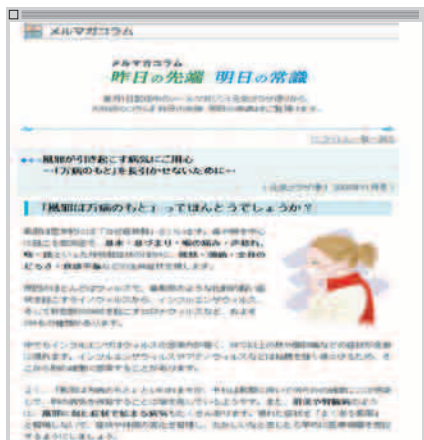
## 食と環境の科学センターからの情報発信と元氣プラザメールマガジンの運営・管理

東京顕微鏡院のホームページでは、食品と環境衛生のタイムリーな話題を解説する「トピックス」を掲載し、衛生思想の普及啓発に努めています。また、元氣プラザのホームページでは、暮らしに役立つ健康情報を、毎月一回メールマガジン「元氣プラザだより」で発行しています。



トピックス(東京顕微鏡院HPより)

東京顕微鏡院のホームページでは、当財団食と環境の科学センターの職員が執筆する「トピックス」を掲載しました。食品期限表示や小規模貯水槽水道、中国産加工食品のメラミン問題、シックハウス問題など、専門



メルマガコラム(元氣プラザHPより)

知識を持つ職員が、食と環境に関するタイムリーな話題を分かりやすく解説し、新たな衛生知識の普及啓発に努めています。

メールマガジン「元氣プラザだより」は、ドクターによる季節の健康コラムや、特定保健

指導チームが執筆する脱メタボコラムなどを連載し、予防医療の普及啓発に努めています。また、東京顕微鏡院ホームページの「トピックス」とリンクし、蒲団のダニ対策といった日常的な話題から時事的な食と環境に関する衛生知識まで、いのちを取り巻く食と環境の安心安全をテーマに加え、内容の充実を図りました。

発行数は、平成20年3月号1,219名から、平成21年3月号1,389名へと堅調に伸びています。



# 組織の活性化

## 両法人共同の社会への貢献、全職員のスピリットの拠り所に

公益事業は当財団の基幹事業であり、また共通の歴史的ルーツをもつ医療法人にとっても精神基盤として重要です。創業の精神に則り、人びとの健康と公衆衛生の向上に先駆的な役割を果たす、というミッションの実現に向けて、新しい基本理念のもと小さな一歩を踏み出しました。

### ■公益事業委員

公益事業は、両法人共同の月次公益会議で討議され、透明性をもって運営されています。こうした部門横断的なコミュニケーションが図れる場において、風土を醸成し、企画や組織の活性化を図りたいと願っています。

平成20年度公益事業委員は、自薦・他薦により、両法人から以下の皆さんが選ばれました。

- ◎東京顕微鏡院:鈴木千種、角野政弥、鎌田有希、白幡季大、武藤彩香
- ◎こころとからだの元気プラザ:真崎正、古明地彰、和田望



### ■『遠山椿吉一魂の系譜』

遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して、公益事業室において調査・編集・制作を行い、当財団・医療法人創立記念の日に発刊いたしました。様々な場において、当財団・医療法人の情報開示に役立てられています。



発行日:平成20年3月15日  
サイズなど:A4変形判 48ページ  
発行部数:2,000部

### ■公益事業レポート2007

公益事業の年次ディスクロージャー誌として発刊しました。ステークホルダーの皆様に対して、様々な場において、当財団・医療法人の公益事業に関する情報開示に役立てられています。



発行日:平成20年4月1日  
サイズなど:A4判 12ページ  
発行部数:2,000部

### ■公益ニュースレター「Leap」

四半期毎の公益事業ディスクロージャー誌として、2008(平成20)年夏に創刊し、職員ほか両法人に関わるすべての人びとを対象に、トップインタビュー、公益事業のトピックス、リレー連載「小笠原健診30年」、両法人の一般事業の現場に取材したニュースなどをレポートしました。



発行:2008年夏、秋、2009年冬  
サイズなど:A4版 8ページ  
発行部数:各1,500部

### ■社内オープンセミナー

#### 「これからの健康づくりとは？」

両法人で働くすべての人びとを対象として、医事衛生の将来展望に則したテーマでセミナーを開催しました。

#### ◆10月29日 第1回 地域保健分野 (保健社会学の観点から)「超高齢社会に求められる健康づくり」 (東京しごとセンター 参加者数:121名)

「健康」を単に疾病がない状態ではなく、生命・生活・人生をより豊かに充実したものとして営むととらえ、「社会の超高齢化に伴い、いかに健康で長寿を実現するか」「超高齢社会構造における予防医療」などを考えるセミナー。桜美林大学大学院老年学研究科教授で加齢・発達研究所所長の芳賀博先生の講演には、「WHOの健康観を踏まえて、本質的課題を示した内容であり、非常に刺激になった」「患者さまの『健康観』を大切にしたいと感じた」など、多数の感想が寄せられました。





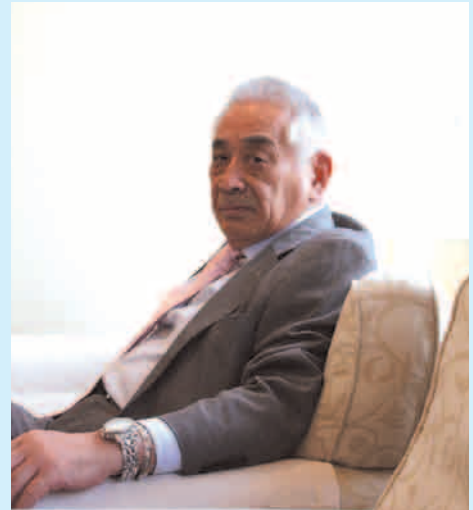
# 私たちにとって、公益とは？

山田 洋輔

財団法人 東京顕微鏡院 理事  
(公益事業、広報、リスク管理、人事担当)

医療法人社団 ころとからだの元氣プラザ 副理事長

プロフィール: 慶應義塾大学経済学部、昭和40年卒。同年三菱油化(現三菱化学)入社。三菱化学専務、三菱ケミカルホールディングス副社長を経て、現在三菱化学顧問。



## 競争の原理が株式会社の世界

40年以上私が身を置いた株式会社の世界では、負けたものは市場を通して淘汰されていく「優勝劣敗」が原則です。アダム・スミス流に言えば、各企業が競争原理に基づき個別最適を徹底追及すれば、結果として、全体最適(全体利益の極大化)が実現すると考える。反面、では本当に個別最適の集積が全体最適なのかと問い直せば、今日起こっている地球規模の様々な環境問題などの議論があります。企業の社会的責任(CSR)がやかましく言われ始め、企業も、ただ利益さえ上げていけば尊重されるわけではない、という方向に世の中が変わってきたのは間違いないと思います。

一方、昨年の後半から世界規模で経済、金融、政治に100年に一度の大変革が起こっています。競争の極限に、どういふ社会が成り立つのかということは、現時点においては誰にもわからない。

## 創業の精神は100%公益

そんななかで、株式会社のロジックとは非常に異なる、当財団や医療法人の世界があるわけです。創業者の遠山椿吉さんは、公益/私益という2つのものを想定したのではない。どうすれば公衆衛生に貢献できるのか、例えば、コレラによって多くの人が命を失うという事態をどうすれば避けることができるのか、といったことだけを考えて、スタートしたのだらうと思います。

## 経済活動をしなが、世のために貢献する

しかし、これまで長い間、民間の検査所として生き続けてきたということは、当然一つの組織体としてきちんとした経済活動を行ってきたということです。赤字が続けば組織は継続できない。収支のバランスを懸命にとる努力をして、「世のため人のために貢献する」ということをずっと指向してきた。むしろ設立後36年かけて基盤を築き、財団法人となることで「寄付行為」ができ、公益事業と収益事業(一般事業)の区分が出てきた、というふうを考えるべきだらうと思います。

自立した経済活動をしなが公益事業を続ける一こうした事業活動を百十数年続けている、ということは、非常に稀で、貴重なことだと思っわけです。

## 公衆衛生の向上のために

公益事業の基本方針を詰める議論の中で一番難しいと感じたのは、われわれの一般事業そのものが、極めて公益的な性格を持っている点でした。

われわれの法人における公益事業とは、企業が事業活動を通して実現した利益のごく一部を、社会貢献に使うという発想とは違います。

一般事業そのものが「いのちと環境」を扱っている、そういう事業体における公益事業は、どう位置づけ整理したらよいか、多くの

皆さんと議論したものが、私たちの法人における公益事業の基本的な考え方としてここに集約されているわけで、現時点における一つの成果だと思っています。



## 私たちの「ウォームハート」

私は、たまたま企業の中で、人事・労務の世界に長い間携わってききましたが、私自身のモットーの一つは、「クールヘッド・バット・ウォームハート」\*という言葉です。

私たちの法人は、「いのちと環境」に貢献することを目的としており、ウォームハートが運営の土台前提となっています。しかし、それを支えるのは非常に冷徹(クール)な頭脳であり、目であって、それがないとウォームハートが実現していかない。

赤字を避け、収支バランスをしっかりとって、健全な組織体、経営体として、これからも長く継続し発展していくためにクールヘッドが不可欠なことは、一般の企業と何ら変わりありません。加えて、サイエンスを扱うものとしての冷徹な頭脳と目、そして精神の土台としてのウォームハート、その双方が、われわれの医療法人や財団においては、極めて大切だと思います。

今後いろいろな変化があつて当然。むしろ変化がなければ継続と発展はない。しかし、この組織誕生の源、百十数年の歴史の源泉、スピリットは変えるべきではないと私は考えています。その本質的なところをしっかりと押さえ、後世に残しながら、どう変化していくかが今後の課題であるともいえると思います。

(公益ニュースレター「Leap」2008 Summerより)

\*マーシャルやピグーといった厚生経済学者たちの言葉で、「クールヘッド」は、冷徹なる競争の場に置かれた企業が、競争に勝ち抜くために不可欠な要素だが、企業には同時に「ウォームハート」が必要だという考え方。ピグーは、経済学を学ぶ人たちはそのことを頭において学んでくれと訴えたという。

# ◇東京顕微鏡院、および「こころとからだの元氣プラザ」の歴史と公益事業

## 3つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院の歴史は公衆衛生の向上によって命を救いたいと願う、遠山椿吉の熱い『人間愛』から始まりました。創業以来、東京顕微鏡院は政府などからの助成を一切受けることなく、自主的な経済活動によって公衆衛生の向上や学会誌発行、予防医療・健康診断など先見的な事業を展開すると同時に、伝染病予防に対する普及啓発など様々な形で社会に貢献してきました。1927(昭和2)年、財団設立を果たした翌年椿吉は他界しますが、脚気の無料巡回診療、小笠原健康な村づくり事業、先駆的なシンポジウム・セミナーの開催など、時代に則した公益事業活動は続き、その「スピリット」は時代を超えて今に受け継がれています。私たちの百余年の歩みは、「すべての人びとのいのちと環境のために」取り組んできた歴史であると言えます。

### 【戦前】

#### 1800年～

(赤字は普及啓発活動、出版、その他公益事業 など)

1891(明治24)年 遠山椿吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成医会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立。検査業務開始  
病原的黴菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売

1892(明治25)年 細菌検査の実務指導を行う講習科を開講  
名称を東京顕微鏡院と改称

1894(明治27)年 機関誌「顕微鏡」第1号発行  
啓蒙用幻灯映画製作  
「顕微鏡の祖」マルピギー200年記念式典、本院にて挙行

1895(明治28)年 飲料水の検査を開始  
コレラ講習会を開催

1896(明治29)年 母乳検査を開始  
回帰熱講習会を開催  
事業拡大にともない、神田区小川町に移転

1899(明治32)年 ペスト講習会を開催

#### 1900年～

1903(明治36)年 遠山椿吉院長、初代東京市衛生試験所長に任ぜられる  
ペスト試験室を新設  
遠山椿吉院長、医学博士の学位を授与される

1907(明治40)年 保健部を新設。広く世間の人びとに対し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始  
遠山椿吉院長、東京市より独ベルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる。同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を囑託される(翌年帰国)

1914(大正3)年 結核予防善悪鑑発行、結核征伐の歌を発表

1915(大正4)年 (院長、長年来の研究による)脚気治療薬うりひんを製品化

1921(大正10)年 創立30年を記念して、『遠山博士脚気病原因之研究』発行

1923(大正12)年 9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失  
9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、10月1日一般業務を開始

1927(昭和2)年 内務大臣より財団法人の設立許可を受ける

1928(昭和3)年 遠山椿吉、肺がんのため遠逝 享年71歳

1929(昭和4)年 脚気の無料診療を開始

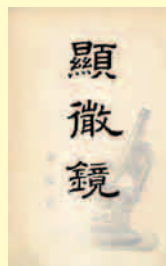
1930(昭和5)年 第1回脚気無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)

1935(昭和10)年 結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施

1945(昭和20)年 戦災により、以後10年にわたり事業中断



東京顕微鏡院講習科 第1回卒業式  
(1892年)



「顕微鏡」第1号  
(1894~1944年)  
※後に「東京顕微鏡学会雑誌」に改称し、  
1944(昭和19)年戦時統制令で  
休刊するまで50年間発行

そも肺病は目に見えぬ  
結核菌の襲い来て  
強しと見ゆる体にも  
呼吸に障りのあるときは  
その弱点につけ入りて  
ついに発するものぞかし  
〜結核征伐の歌〜  
一番より



うりひん広告



震災後に復興した東京顕微鏡院本院  
(1925年竣工)

■歴代代表者と在任期間

創立者(院長)	遠山 椿吉	1891～1928年	第4代(院長)	高橋 梯三	1957～1967年	第7代(理事長)	下村 満子	1995～2007年
第2代(院長)	遠山 正路	1929～1954年	第5代(理事長)	山田 匡蔵	1967～1989年	現理事長	山田 匡通	2007年～
第3代(院長)	細谷 省吾	1955～1957年	第6代(理事長)	山田 和江	1989～1995年			

【戦後】

- 1954(昭和29)年 遠山正路院長より事業を継承
- 1955(昭和30)年 診療所を開設、細菌検査所を再開し、業務再開
- 1967(昭和42)年 職域を対象とした健康診断業務を開始  
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による集団検査を拡大
- 1972(昭和47)年 東京都の委託を受け、小中学生の大気汚染の影響調査を実施(5年継続)
- 1974(昭和49)年 建替えによる新院舎完成  
人間ドック事業を開始  
付属臨床検査所を登録
- 1975(昭和50)年 食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、食品衛生検査所を開設
- 1976(昭和51)年 多摩分室を立川に開設
- 1978(昭和53)年 離島村民の健康管理を目的とした「小笠原健康な村づくり事業」を開始  
「小児ぜん息母親教室」を開催
- 1979(昭和54)年 水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける(簡易専用水道検査)
- 1986(昭和61)年 再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」開催  
立川衛生検査センターを開設
- 1987(昭和62)年 学術普及誌「健康と環境」創刊(～2000年)。付属第2臨床検査所を登録
- 1991(平成 3)年 創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」開催
- 1992(平成 4)年 シンポジウム「ベイブリッジフォーラム'92—21世紀への対がん戦略」開催  
琉球大学、西会津町役場とともに福島県西会津町住民の健康調査を実施(～1993年)
- 1993(平成 5)年 事業年報の発行開始
- 1996(平成 8)年 食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設(2001、2002、2005年に順次拡大)
- 1997(平成 9)年 立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併(1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)
- 1998(平成10)年 シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催



「小笠原健康な村づくり事業」  
(1978年～)



「健康と環境」第1号  
(1987～2000年)



「事業年報」第1号  
(1993年度～)



こことからだの元氣プラザ  
(2003年)

2000年～

- 2001(平成13)年 食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を移転し、拡大  
トータルヘルスセンターBe-Well! 女性のための生涯医療センターV i V iを開設  
創立110周年を記念して、日米メディカルシンポジウム  
「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を開催
- 2002(平成14)年 創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」開催
- 2003(平成15)年 医療部門を統合・拡充し、医療法人社団こことからだの元氣プラザを設立
- 2005(平成17)年 財団法人東京顕微鏡院創立115年、医療法人社団こことからだの元氣プラザ  
創立3年記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催
- 2007(平成19)年 メディカル・シンポジウム  
「医療の未来、日本の未来—なぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催
- 2008(平成20)年 遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設  
立川研究所を一ヶ所に統合拡大  
こことからだの元氣プラザ(飯田橋)と市ヶ谷本院の施設再配置
- 2009(平成21)年 「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾 治氏、同奨励賞を川崎 晋氏に授与  
遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム  
「東京の水の源流を探る～豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水～」を開催



「いのちとは何か、生きるとは何か」  
(2005年)



「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」  
(2009年)

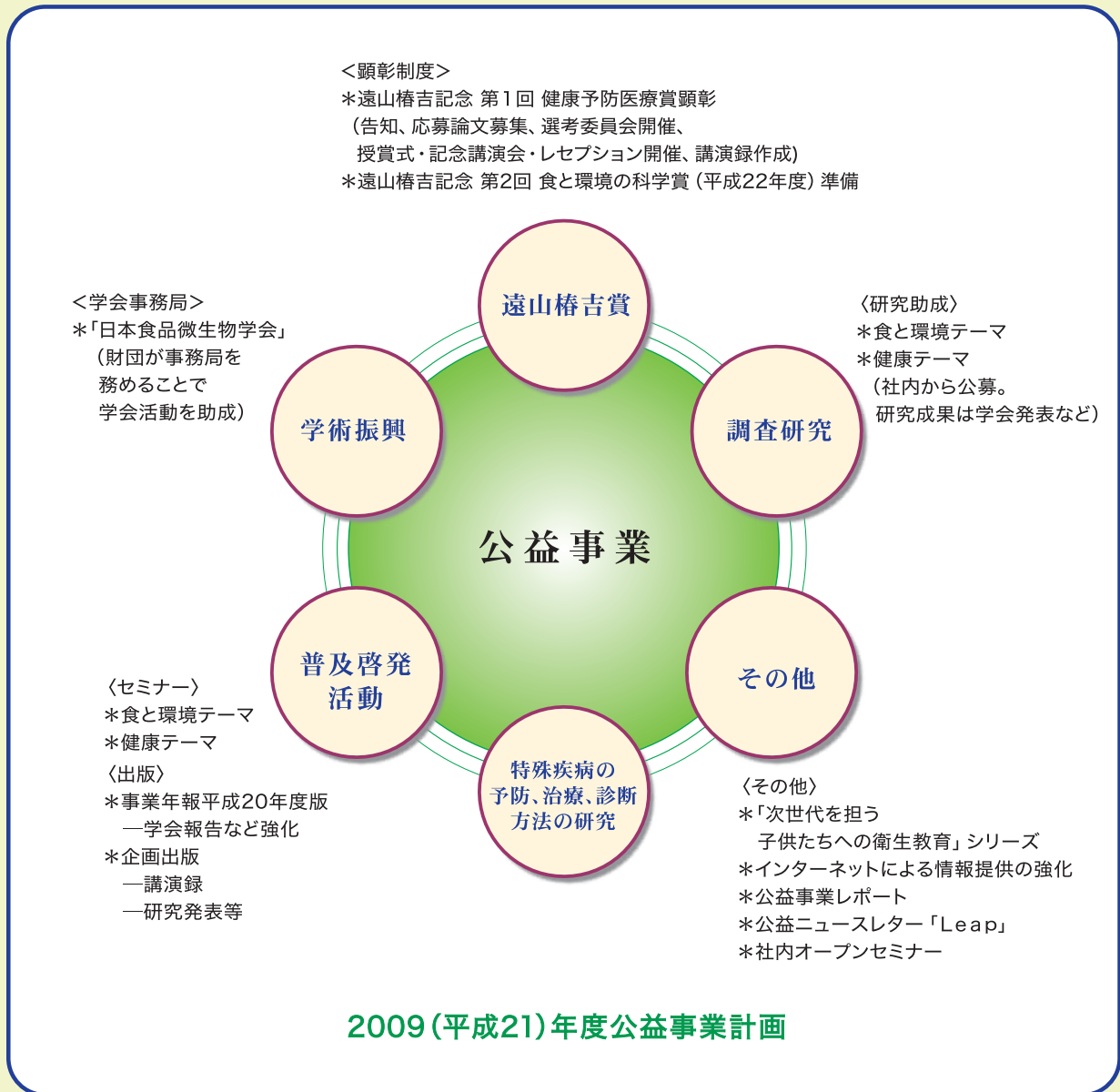


「遠山椿吉生誕150年記念シンポジウム」  
(2009年)



## ◆多彩な社会貢献事業の展開を予定

遠山椿吉賞の運営、セミナー、シンポジウムなど普及啓発活動のほかに、学術振興や研究助成など、創業の精神に基づいてバランスの取れた公益事業活動を行い、医事衛生の進歩と公衆衛生の発展をはかり、人びとのいのちと環境のために貢献します。



## ◆将来に向かって…

東京顕微鏡院 公益事業室および「こころとからだの元氣プラザ」広報室は、公益事業が社会への貢献活動であると同時に、全職員の活力向上、組織内の活性化、人材育成などの一翼を担う事を目指します。

そして将来的に、公益事業が私たちの誇りと創業の精神の実践となるよう、職員の皆さんと一緒に築き上げていきたいと考えます。

発行:

財団法人東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 www.kenko-kenbi.or.jp

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒102-8508 東京都千代田区飯田橋3-6-5 TEL.03-5210-6897 www.genkiplaza.or.jp